

聖書：マタイ 18：15～20

説教題：わたしもその中にいる

日時：2019年12月8日（朝拝）

今日は先週と同じ箇所を読ませていただきました。ここはいわゆる教会訓練あるいは教会戒規について述べられている箇所として有名なところです。教会の中で罪を犯した人がいたらどうするか。その扱い方、手順について述べられています。一見、裁判的な手続きが述べられている少し怖い箇所のようにも見えますが、文脈を押さえてここを読むなら、丸っきり違ったものとして見えて来ることを先週申し上げました。直前の12～14節を見ると、神は迷い出た一匹の羊を捜し求められる方であることが記されています。99匹をそこに残しても、迷い出た一匹を神は捜しに出かけられる。この小さい者たちの一人が減びることは天の父のみこころではありませんと14節に語られました。このような神の御心を具体的に実現する方法として、15節以降のいわゆる教会訓練が語られています。ですから教会訓練は、罪を犯した人をさばき、切り捨てるための方法ではありません。罪を犯した人は神のもとから迷い出た人、神の道から外れて別の道に行こうとしている人です。その人が神のもとに立ち返って来れるように助けることが、この教会訓練の眼目ということになります。

前回は15節から、教会訓練の第一段階について見ました。ポイントだけ簡単に振り返りますと、ある人が罪を犯した場合、行って関わるのはそれを知った人、それに気づいた人です。その人は他の人にその罪を告げてはなりません。牧師や長老にもです。ある人の不名誉なことではできるだけ他の人に広めないことが愛の原則に生きることです。ですからその人が行って、二人だけのところで語ります。そこで「指摘しなさい」と言われていますが、これは上から目線で断罪するという意味でないことも先週見ました。これは相手の人が、自分がしたことは罪だと認識して、正しい道に立ち返るように助け導くことです。相手の人が進んでそのことを認めることができるように、謙遜と柔和をもって関わるのです。それによって相手の人が聞き入れて立ち返るなら、それは最高の結果です。そしてそれはそれをもって終了です。関わった人は相手の罪について他の人に言いふらしてはなりません。しかしいつもそのようにうまく行くとはいりません。その場合はどうしたら良いか。そのことが今日見る16節以降に記されています。

16節は教会訓練における第2段階です。相手が聞き入れない場合、「ほかに一人か二

人、一緒に連れて行きなさい」とあります。一人では相手にしなくても、二人または三人で行って関わるなら、もしかすると相手はより重大に受け止めてくれるかもしれません。ここでも相手に関わるのは断罪するためではなく、相手を助けるためです。一人の関わりでは足りない分を補ってもらい、またその関わりがより客観的なものとなるためです。しかしそれでも聞き入れない場合はどうしたら良いでしょう。イエス様は第3段階として、17節で「教会に伝えなさい」と言われます。さてこの「教会に伝えなさい」とは具体的にどうすることでしょうか。ここで一斉に教会の兄弟姉妹に伝えるということでしょうか。あるいは信徒総会を開いて、みんなでこの件をどうするか話し合うということでしょうか。この「教会」をどのように取るかは教会政治の理解の仕方によって変わって来ますが、カルヴァンはここを、この言葉が語られた歴史的状況を踏まえて、具体的には「長老会」を指すと見ます。このイエス様の言葉が語られた当時、今日のような教会の形態はなく、そこにあったのはユダヤ人の会堂あるいは集会でした。そしてユダヤ人の会堂は長老たちによって治められていました。これは旧約の民が長老たちによって治められ、長老たちによって代表された在り方を踏襲したものです。そんな当時に身を置いて考えてみれば、この「教会に伝えなさい」は、教会を構成する全員に告げて、信徒総会でどうするかみんな話し合うという意味であるよりは、民を治める長老たちの集まりに伝えなさいという意味に他ならない。教会を治める長老会に告げることがイコール教会に伝えなさいということであるということです。そして教会は、その統治機構である長老会を通して、その人に訓戒します。適用の仕方は教会政治の理解の仕方によって幅があると思いますが、こうしてこの問題は教会として関わる出来事になります。しかしこの段階を経ても相手の人が聞き入れず、悔い改めなかったら、どうしたら良いのでしょうか。その場合は「彼を異邦人か取税人のように扱いなさい」とあります。これは一言で言って「除名」にすることです。神の民に属さない不信者であると宣言して、そのように接することになります。

この決定に当たっては次の二つのことに注意すべきだと思います。一つは「除名」はその人を不信者と判断して、そのように接するわけですから、その人がイエス様を主とする信仰に生きていないことが明確でなくてはならないということです。単に長老会のアドバイスに従わないからというだけで、この処置をしてはならないということです。そしてもう一つはこの除名さえも本人の悔い改めを願いつつ行なうものであるということです。これは相手に「あなたがその罪を悔い改めなければ、神の民の交わりにとどまっていることはできない」ということを知らせ、悟らせるための苦渋の選択です。腹

いせや、単なる処罰として行うものではありません。これは教会がなせる最終警告であり、これさえも本人の救いへの回復を祈り願って行なうべきものであるということです。

さてこの教会戒規を行うにあたって私たちが心に留めるべき大切な二つのことをイエスは 18 節以降で語っておられます。その一つは 18 節です。「まことに、あなたがたに言います。何でもあなたがたが地上でつなぐことは天でもつなぐがれ、何でもあなたがたが地上で解くことは天でも解かれます。」 これと似た言葉は前にも出て来ました。16 章 19 節です。信仰告白をしたペテロにイエスは言われました。「わたしはあなたに天の御国の鍵を与えます。あなたが地上でつなぐことは天においてもつなぐがれ、あなたが地上で解くことは天においても解かれます。」 これは一般に「かぎの権能」と呼ばれるものです。何のかぎかと言えば、それは天国の門を開けたり閉めたりする鍵です。18 節の「つなぐ」また「解く」という言葉には印がついていて、欄外の 18 に「禁じる」また「許す」と訳せることが書いてあります。このかぎの権能をイエスはマタイ 16 章 19 節ではペテロに与えると言われましたが、今見ている 18 章 18 節では「あなたがた」教会に与えると言っています。そしてここで言われている「教会」とは、先ほど述べましたように、具体的には群れを治める「長老会」を指しているとするなら、鍵の権能は実際には長老会によって行使されるものと理解されます。ここでイエスが言っていることは、長老会を通して教会が決定する「つなぐ」「解く」、あるいは御国に入ることを「禁じる」「許す」という決定は、天上の決定と直結しているということです。教会訓練のプロセスを通して、教会が悔い改めない兄弟姉妹に対して、あなたが今の態度を取り続けるならあなたは天の御国のメンバーではないと宣言するなら、天においてもそのようになっている。あるいは教会訓練のプロセスの中で悔い改めに至った兄弟姉妹に教会が「あなたは主に受け入れられており、天国の民の一人とされている」と宣言すれば、天においてもそうになっているということです。

もちろんこれは地上にある教会の決定が先で、天がそれに従うということではありません。これは次に述べることと似ています。裁判官が、ある裁判で被告に対して死刑を宣告した時、その宣告にはもちろん権威があります。それはその裁判官その人自身に権威があるからではありません。その裁判官の宣言に力があるのは、その裁判官の下した判決が、その国や町で定められている法律に忠実である場合のみです。その場合、裁判官その人に権威があるわけではありませんが、その判決は大きな力を持ちます。同様に教会の決定も、それ自身には何の権威もありませんが、これを定められた神の御心に基

づいて、神の御言葉に忠実である限りにおいて力を持つのです。イエス様はここで地上の決定と天の決定を切り離していません。ですから私たちもそのように考えなければなりません。この奉仕に当たる長老たちは、自分たち自身に特別の権威が与えられているかのように誤解することなく、あくまで主の御言葉に忠実に従って事を行うようにしなくてはなりません。そしてその上でなされる決定は天上の決定を映し出すものであるという厳粛な真理を常に覚えて、この奉仕に当たらなくてはなりません。またすべての教会員も、地上の教会が決めることは単なる地上的なわざにしか過ぎないと軽んじることがないように、むしろそれは天の現実と直結するものであることを心に留めて、これを重んじ敬虔に服する者でなくてはならないのです。

もう一つのことは19～20節です。「まことに、もう一度あなたがたに言います。あなたがたのうちの二人が、どんなことでも地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父はそれをかなえてくださいます。二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです。」この御言葉はしばしば2人か3人で一緒に祈る小グループの祈りについての約束であるかのように引用されることがありますが、覚えておくべきはもともとは教会訓練に関する文脈の中で語られているということです。ここで二人また三人が祈ることが考えられていますが、具体的にはどんな状況が考えられているのでしょうか。その一つは、15節に出て来た二人です。罪を犯した人のところにある人が行って、二人だけのところでその罪を指摘した時のこと。その相手とともに祈る時のことです。あるいは16節の二人とも考えられます。第二段階として、もう一人の人を連れて行きますが、相手の人と関わるに先立って二人が心を合わせて彼のために祈るという状況です。あるいはもう一人連れて行くことになれば合計3人の祈りになります。さらに別の可能性としては「教会に伝える」という第3段階に至って長老たちが具体的に取り組むことになりますが、その長老たちの数をこれは指しているという見方です。その小会の人数が少なくても、2人であっても3人であっても心を一つにして祈るならということです。他にも可能性が考えられるかもしれません。しかし結論として、これらのどれか一つに限定する必要はないと思います。むしろイエス様は、このような教会訓練に関わる様々なプロセス全部を含めてこう言っているのではないのでしょうか。そのあらゆるプロセスにおいて、これに関わる人々が共に心合わせて祈るなら、そこにキリストが臨在すると約束下さっている。そしてこの働きを導いてくださる。

私たちはこの主の約束をいつも心に覚えて、教会訓練のわざに当たる者でありたいと思います。私たちはこの 18 章に記されている父なる神の御心を感謝を持って受け止めさせられました。神は迷い出た一匹の羊を大切に追い求めてくださる方です。その方の憐れみの御心によって、私たちは今日このようにして神のもとにある一匹の羊として、神の民の一人として、豊かな恵みの内に生かされています。そのことを心から感謝する私たちは、ただ自分の幸いを歌うだけでなく、この神と同じ心で、迷い出た羊を得るための働きに仕えるように招かれています。しかし自らも迷いやすい私たちにどうしてこのような難しい働きができるかと思います。私が出て行ったのでは相手を回復させるどころか、逆につまずかせてしまうだけではないか、一層遠くへ追いやってしまうだけではないかと恐れる者です。しかしイエス様の御言葉に従って二人でも三人でもイエス様の名において集まって祈るなら、イエス様ご自身がその中にいるとイエス様は言われました。イエス様は失われていた私たちを取り戻すために、このクリスマスの時、父なる神から遣わされて私たちのところに来てくださった方です。父なる神の愛を誰よりもよくご存知で、その愛のお心をこの世で実現するため、私たちのところに来てくださり、その尊いのちを引き換えにしてでも私たちを回復へと導いてくださるまことの羊飼いなる主です。この主が主の名において集まり、祈る私たちのただ中に臨在してくださり、私たちの取り組みを先頭に立って導いてくださるのです。私たちはこの主の約束を感謝して、いつも二人また三人でも集まって、ともに心を合わせて祈ることを大切に、優先する者でありたいと思います。他の兄弟姉妹のために日々とりなしつつ、もしそのために具体的に行動すべきことを思わされるなら、二人または三人で祈ることからすべてを始めたいと思います。そうしてともにいて導いてくださる主によって私たちが行う教会訓練の奉仕が、迷い出た人々を父なる神のもとに連れ戻すために用いられるものとなりますように。そこに私たちをそのように求めて、一人子さえも遣わしてくださった父なる神への言い尽くせない私たちの感謝を現しつつ、この父なる神の素晴らしい御心が益々広がり、父なる神に栄光が帰されるために仕え、用いられる特権と幸いに生かされて行きたいと思います。